

## 和田知子作「春を待つなずな」

< 前編 >

梅田孝子(健也の次男繁郎の妻) おじいちゃん、おじいちゃん! イヤぁね、また今日も公園に行っちゃったのかしら。

(効果音) (階段を降りる音)

梅田繁郎 何だ、またおやじ、朝っぱらから公園かよ。

娘理絵 せいせいするよ。朝からおじいちゃんいるとウザいんだもん。

孝子 いいからあんたはさっさと食べて学校行きなさい!

理絵 今日は朝練ないからゆっくりでいいのー!

孝子 ねえ、あなた。おじいちゃんの老人ホームのこと、本気で考えましょうよ。今はまだ自分でちゃんと帰ってくるからいいけど、これ以上はわたしも面倒見切れないわよ。

繁郎 また朝からその話かよ。この子の受験が終わってからそのことは話し合おうてことにしたじゃないか。

理絵 そうよお母さん。わたし、泉学園に行きたいんだから、お金ためといてよ。

孝子 よく言うわね。だったらさっさと学校に行行って、予習でもしたらどうなのよ。お金だけあったって、高校なんかいけないのよ。

健也ナレーション そんな家族をしり目に、わたしは今日も、近所の公園に来ていました。

健也 よう、佐久間さん。来とったかぁ。

佐久間 おお、梅田さん。

健也 おっと、どっこいしょ...と。寒くなったなあ。

佐久間 ああ。

ナレーション わたしの名は梅田健也といます。妻は 10 年程前に亡くなり、次男の繁郎の一家が同居しています。年は、日本の敗戦の日に 25 歳の誕生日を迎えたから、80 に近いかと思うんですが、もうはっきりとは覚えていません。まだ自分では元気なつもりなのですが、このごろとんと物覚えが悪くなり、時々ふっと自分のやってることが分からなくなるのが、一抹の不安です。

わたしは公園に来ると、すっかり顔なじみになった佐久間のじいさんと、こうして何時間もたわいもない話をしています。うちにいても、嫁とはほとんど会話らしい会話もないので、こうしているほうが気が休まるのです。

健也 最初はさ、母ちゃんが死んだあと、長男の一家と住んでたんだ。長男の一家は、次男のこと違って、ちゃーんとしててさ、嫁もまめに働かし、孫も、少々やんちゃだが、“おじいちゃん、おじいちゃん”て慕ってくれたんだ。

佐久間 ああ。

健也 だけどあれだよ。長男もその嫁もヤソ教でさ、日曜日は一家で教会に行っちまうし、わたしにまで、その、何だ、キリストとやらを信じろ、信じろってうるさいんだ。あいつら、わたしのこと、何かというと「罪びと」だって言いやがる。冗談じゃない。わたしや悪いことなど何一つしとらん。戦争が終わって帰ってきて、裸一貫からがむしゃらに働いて、息子2人とも大学まで出してやったんだ。酒にも賭け事にも、一度も手を出したことはない。そのわたしが「罪びと」だって言うんだ。あったま来て、7年前、長男も嫁も孫もみーんな追い出しちまった。今はもう、どこにいるかも分からない。

佐久間 そりゃあんたも頭に来たろうよ。けど独り暮らしもこたえるしなあ。

健也 それで今度は次男一家を呼び寄せたらさ、こいつがまたどうしようもない。

佐久間の孫 おじいちゃん。もうすぐ昼ご飯だよー。お母さんが帰ってきなさいだって。

健也 ほらお孫さんが呼んでるよ。

佐久間 じゃ、また。

(効果音) (枯れ葉をゆっくり踏む音)

健也モノ 昼ご飯か…。わたしもそろそろ帰らなくては。だが帰ってもなあ。

(ブリッジ) (健也の回想)

繁郎 え？ NHKが見たい？ 何言ってんだよ。ダメダメ。今日は首位攻防戦があるんだから。おやじは昼間暇だろ。ビデオに取って昼間見てくれよ。おい母さん、7チャンネルにしてくれ。

孝子 おじいちゃん、また電気がつけっ放し。気をつけてくださいよ。

理絵 ちょっとお、それあたしのコップだから触らないでよ!

(ブリッジ) (回想終わり)

健也モノ わたしは何も悪いことなどしていない。…家だってわたしの家だ。彼らの生活には一度も口出したこともないし、だれにも迷惑はかけてない。注意されたり、嫌われる理由などないんだ。なのに、みんなしてわたしを邪険にして、全く考えると腹が立つ。家には…帰りたくない。どっか…どっか遠くへ行きたい。

ナレーション それからどれくらい時間がたったでしょうか。気がつくとなわたしは、どこ行きかも分からないバスの座席に座って揺られていました。

(効果音) (バスの車内。エンジン音、加速音など)

車内アナウンス 終点、大森が崎、大森が崎です。

(効果音) (乗客が次々に降りていく。)

運転手 おい、じいさん。終点だよ終点。

健也 あ…ああ、終点…か。

運転手 じいさん、シルバーパスはどうしたの？

健也 え…シルバーパス…。ここはどこかね？

運転手 何言ってんだよ。ここは大森が崎じゃないか。じいさん、シルバーパスは？

健也 シルバー シルバー?...  
運転手 パスがないなら始発からの料金もらうよ。1,680 円。  
健也 ああ、金は...持っとらんよ。  
運転手 何い？ 金を持ってない？ じゃあどうするつもりだ？ このまま降りるつもりか？ 、  
無賃乗車は犯罪なんだよ、じいさん。  
健也 は、犯罪？  
ナレーション その言葉を聞いて、わたしはとても恐ろしくなりました。別に無賃乗車をするつ  
もりでバスに乗ったわけではありませんが、確かにお金は 1 円もなかったので  
す。  
健也 は、犯罪なんて、わたしはそんなつもりは...。  
運転手 おいじいさん。ふざけるなよ。わざとじゃなければ何でも許されるってのか？ え？  
ちょっと警察に行ってもらおうか。  
健也 け、警察？ ちょ、ちょっと待ってくれ。...グアア！  
ナレーション 運転手は、いきなりわたしの手をつかみ、バスから引きずり降ろそうとしました。  
その時です。  
育郎(長男の息子) 乱暴はやめてください。代金は代わって払います。だから乱暴はやめてくださ  
い。  
ナレーション 先にバスを降りた見ず知らずの中学生くらいの少年が、そう言って運転手の腕  
をつかみ、わたしから引き離してくれました。  
運転手 君が払うのか？ あんた、このじいさんの知り合いか？  
ナレーション 少年は何も答えませんでした。  
運転手 まあ、払うって言うんならこっちはそれでいいけど、1,680 円も君払えるの？  
ナレーション 少年は、小さい小銭入れからありったけのお金を運転手の手のひらに並べまし  
た。しかし、何度数えても、1,680 円にはなりませんでした。  
運転手 1,665 円。君の全財産か。...本当にいいのか？  
育郎 はい。で、でも...。  
運転手 いや、いいよ。ほら、これはお釣りだ。  
ナレーション そう言うと、運転手は少年の手に 165 円を握らせ、残りの 1,500 円だけを機械に  
入れました。  
(効果音) (バス、走り去る。)  
ナレーション わたしは頭がすっかり混乱してしまい、しばらくの間は何が起こったのか分かり  
ませんでした。わたしはいつの間に、バスになど乗ったのでしょうか。わたしは  
一体どこに来てしまったのでしょうか。ここは一体どこなのでしょう。今、とても大変  
なことが起こってしまいましたが、わたしはとりあえず助かりました。  
健也モノ あ、そうだった。あの子にお礼を言わなくては。  
ナレーション しかし、そう思って辺りを見回した時には、もう少年の姿は遠くなっていました。

今から走っても、とても追いつきそうにありません。

健也モノ 何てことだ! あの子はわたしのバス代のために、ほとんど全財産を使い果たしてしまっただ。

ナレーション わたしはありったけの力を振り絞って叫びました。

健也 おーい! 待ってくれー!

ナレーション 少年はわたしの声に気づき、振り向きました。しかし次の瞬間、わたしの全身の力がガクリと抜け、情けないことに、わたしは、その場に腰が抜けたようにしゃがみ込んでしまいました。

< 後編 >

育郎 おじいちゃん、だ、大丈夫ですか!?(走り寄り)僕につかまってください。あそのベンチに座りましょう。よいしょ...と。

健也 はあ、本当に申し訳ない。助けていただいた上に、ご迷惑をかけてしまって。

育郎 それより、これからどうしますか? 立って、また歩けますか?

ナレーション どうもさっき大声を出した時に力を使い切ってしまったらしく、それはとても無理そうでした。

育郎 家はどこですか? 家に電話して、だれかに迎えに来てもらいましょう。

ナレーション 少年は、そう言って公衆電話まで走っていき、さっき運転手が返してくれたお金で、わたしの家に電話をしてくれました。

健也 君は何でさっき、わたしを助けてくれたのかね? わたしは、君のような立派な若者に助けてもらう価値など全くない、ただの年寄りだ。偉くもないし、金持ちでもない。一生懸命生きてきたつもりが、子に嫌われ、もうろくしてバスをただ乗りして、犯罪者とまで言われてしまった。この木や、あの畑と同じだ。ただこの年まで生き長らえて、大した実もつけず、大した収穫ももたらさずに、枯れて、死んでいくだけだ。わたしなど助けて何になる?

ナレーション 少年は、目の前の畑をじっと見つめ、何かを考えていたようですが、やがてポツリと話し出しました。

育郎 死んでいない。この木も、あの畑も、死んでなんかいない。

ナレーション そう言うと、少年は畑に向かって走り出しました。そしてそのまま畑の中に入っていく、ごそごそやってたかと思うと、何かを手にして戻ってきました。

健也 それは...なぜなかね?

ナレーション そうです。少年が手に持っていたのは、泥の付いたなぜなでした。

育郎 「私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。」

健也 ...何だね、それは?

育郎 聖書に書かれている言葉です。この草は、神様によって命を与えられ、成長しています。精一杯神様に向かって葉を広げ、茎を伸ばして、神様を褒めたたえて

生きてます。けど人間は、同じように神様によって造られたのに、神様の言うことを聞かず、神様に背いてしまったんです。僕は、さっきおじいさんが言ったように決して立派な人間なんかじゃありません。僕たち人間は、生まれた時から神様に対して「罪」を背負っているんです。

ナレーション わたしは、目の前の、まだどこか幼さの残る少年の、およそ中学生らしからぬ言葉に目をみはると共に、内心ハッとしました。それは、7年前、家から追い出してしまった、わたしの長男の話と全く同じだったのです。

育郎 神様は罪を裁かれるんです。「罪」に対する裁きは「死」、それしかないんです。僕は小さい時、大変な罪を犯したことがあります。僕は小さい時、おじいちゃんの家と一緒に住んでいました。おじいちゃんは僕のことをすごくかわいがってくれて、僕もおじいちゃんが大好きだったんです。でも、僕が6歳の時、何をしたかは忘れちゃったけど、何かひどいいたずらをして、おじいちゃんに怒られました。その時、僕はおじいちゃんにひどいことを言ってしまったんです。

(効果音) (回想エコー)

育郎(6歳) フンだ! おじいちゃんなんか大っ嫌い! 死んじゃえ! おじいちゃんなんか死んじゃえ!

健也 このわたしに向かって死ねだと?

(回想終わり)

育郎 僕の両親はクリスチャンで、おじいちゃんはそうじゃなかったから、普段からよく争っていました。でも、僕のこの一言がきっかけで、結局両親と僕は、家を追い出されました。僕は、おじいちゃんにも、両親にも悪いことをしただけじゃなくて、神様のことまでおじいちゃんに悪く思われてしまったんです。こんな僕は、死んで当然なんです。でも、僕の代わりに、イエス様が死んでくださった。僕のあのひどい罪は、イエス様の十字架によって許されたんです。

健也(モノ) 何てことだ。今、目の前にいるのは、7年前、そのキリスト教の信仰のゆえに追い出した長男の一人息子ではないか。そうだ、この面立ちは、確かに孫の育郎だ。

育郎 だから、僕は罪を許されたから、今度はお年寄りをできるだけ助けようと思った。だから僕は、あなたを助けました。

健也 育郎! お前は育郎か! わたしの孫の育郎か!

育郎 お...おじいちゃん? やっぱりそうだ。最初に会った時から何となくそんな気がしてたんだ。

健也 育郎、悪かったな。お前を追い出したのは、お前のせいじゃない。わたしが「罪」を認めなくなかったからだ。お前のせいなんかじゃない。許してくれ。

ナレーション その夜、わたしは一人で苦しみました。

健也(モノ) わたしは何てひどい人間なんだ。わたしはこの年まで間違ったことなど何一つ

せず、自分の力でまじめに生きてきた、この手で妻子を養ってきたと思っていた。その自負心が、いつの間にか回りが何でも自分の思い通りにしないと気が済まない、自分中心の人間にってしまったんだ。そしてすぐ人を裁き、自尊心を少しでも傷つけられると、ものすごく腹を立てた。これが「罪」なのか。これが長男や育郎が言った「罪」ならば、わたしは同じように神様をも苦しめているんだろうか。だとすれば、わたしはどうしたらいいんだ？ ああ神様、助けてください！

ナレーション わたしは、うまれて初めて神様の名を呼びました。その声を、神様は聞いてくださったんだと思います。どう言ったらいいかわかりませんが、その日から、それまでの人生で一度も味わったことのないような、喜びがわき上がってきたのです。それから1週間ほどたった、ある日曜の朝でした。

(効果音) (公園。小鳥のさえずりなど)

健也 なあ、佐久間のじいさん。イエス様はな、わたしがした悪いこと全部の身代わりになって十字架にかかったんだと。

佐久間 ん？ イエス様？

健也 そしてな、罪を認めてイエス様を信じるなら、わたしらは救われて永遠の命を頂けるそうだ。

佐久間 あん？ え・い・え・んの命だ？

健也 ああ、永遠の命だ。イエス様を信じるなら、わたしらも、こんな年寄りも生まれ変わるんだと。

佐久間 ほう、そうかね。そりゃまたありがたい話だねえ。

ナレーション わたしは、あのあと、長男夫婦が贈ってくれた聖書を開いて、その一節を繰り返し唱えました。育郎があのおなずなを採った時に言っていた言葉です。「私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。」(コリント3:6) わたしは、ふっと、“ああ、これは、育郎のことでもあるんだなあ”と思いました。神様は、わたしが追い出した孫を、7年の間にあんなにも立派に成長させてくださいました。それだけでなく、この、年を取って、もう生きる意味も希望も失いかけてたわたしにも、新しい命を与え、更に成長させてくださるというのです。何というお恵みでしょうか。

繁郎 (向こうから)おーい、おやじ。教会に行くんだろ？ 兄貴たちが迎えに来てるぞ。

健也 ああ、今行くよ。じゃ佐久間さん、今日はこれで。これから、この年で、生まれて初めて教会に行くんだ。

佐久間 ほう、そうかね。じゃ気をつけて。また話を聞かせてくれよ。

(BGM) (聖歌229「驚くばかりの」)

ナレーション わたしは、長男一家が、そう、孫の育郎と共に待っている車に向かって、ゆっくりと歩き出しました。もうすっかり冬支度をした公園の木々。でも、わたしはその時、あの枯れた地面に、太い根を張って、じっと春を待つなずなを思い出してい

ました。

(完)